

# 知的障害教育校におけるリズム遊びの意義と課題

## —「自立活動」領域に着目して—

茅野 理子

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日



# 知的障害教育校におけるリズム遊びの意義と課題<sup>†</sup>

## —「自立活動」領域に着目して—

茅野 理子\*

宇都宮大学教育学部\*

本稿の目的は、知的障害教育校小学部における集団リズム遊びの実践を通して、特別な支援を必要とする児童がどのような「学び」をしたかを明らかにし、そこから集団リズム遊びの意義と課題について検討することであった。その結果、以下のことが考察された。①児童は相互に学びあっている。②学びは他者の動きや言動の模倣に起因し、その点において集団リズム遊びの教育的意義が認められる。③模倣は「見ること」を基礎とするが、「見る」から「観る」への発展により、無意図的な模倣から意図的な模倣に移行し、ここにおいて本来の「学び」につながっている。④一方、児童一人一人の動きを的確に観察評価する指導者の力量が課題となった。

キーワード：知的障害教育、リズム遊び、コミュニケーション、学びあい、表現、自立活動

### 1. 研究の背景

知的障害教育校の特別支援学校小学部で、平成20年から年2～4回のリズム遊びの活動を続け、約30回に及ぶ実践を通して、子どもたちから多くの学びがあった。

集団リズム遊びを「リズム・かかわり・表現」と位置づけ、実践では、一人一人の自由性や創造性を重視することで、自尊感情を高め、そのことが他者との関わりを豊かにするように運んでいく。具体的には、児童の動きを認め、称賛することを通して、自分も「できる」、「やりたい」という思いを強くするようにしている。

ところで、平成11年の特別支援学校学習指導要領の改訂において、それまでの「養護・訓練」の名称が「自立活動」に改められた。国立特別支援教育総合研究所ホームページによると、「ここでの『自立』とは、幼児児童生徒がそれぞれの障害の状態や発達段階に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすることを意味して」と解説されている。

指導要領では、その内容について、「人間として基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素で構成しており、それらの代表的な要素である26項目を『健康の保持』、『心理的な安定』、『人間関係の形成』、『環境の把握』、『身体の動き』及び『コミュニケーション』の六つの区分に分類・整理したものである」（文部科学省，2009，pp.7-8）と示している。

その上で、「個々の幼児児童生徒に指導する具体的な指導内容は、六つの区分の下に示された26項目の中から必要とする項目を選定した上で、それらを相互に関連付けて設定することが重要である」（前掲書，p.9，下線筆者）としている。

発達障害児のコミュニケーションに関する先行研究を検索すると、これまで多くの先行研究がコミュニケーションについて言及しているが、その多くは、言語によるコミュニケーションを重視しているように思われる。

自閉症のDIRプログラムを提唱したS. グリーンスパンら（2009）は、ASD<sup>註1</sup>と関わる人にとって、コミュニケーションは最も大事なことであるが、言葉を返すことだけがコミュニケーションと考えられがちであることを指摘し、言葉が発達する前の主に身ぶりで意志を伝える段階、ノンバーバル・コミュ

<sup>†</sup> Masako CHINO\*: A Study on the Significance and Problems of Group Rhythmic Playing in Intellectual Disability Education

\* School of Education, Utsunomiya University  
(連絡先: chinom@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

ニケーションの時期からコミュニケーションは始まっている。言語能力はノンバーバル・コミュニケーション能力に大きく左右され、社会性や感情のコントロール能力を身につけるためにさらに大切と示唆している。

昭和56年（1991）に、「発達障害児のノンバーバルコミュニケーション行動の指導をめぐる」と題されたワークショップの中で、「わが国では基礎研究や応用研究が少なく、今後この領域の研究が質量ともに充実することが望まれる。」（小林・加藤，1991，p.71）と提言されているが、我が国における発達障害児に対するノンバーバル・コミュニケーションに関する研究は未だに少ない。

また、コミュニケーションの背景には、ラポール<sup>註2)</sup>がある。例えば、遊戯療法では、その機能（働き）として、信頼できる治療者との関係の中で、十分に認められて対応されることによって、子どもの自己理解を深めることや、自尊心を高める働きがあること、対人関係の形成や社会性の発達、感情発達を助ける機能（安心できる場所で、治療者との信頼関係を軸にして継続的に行われることによって、はじめて有効に作用する）を挙げている（原，2014，p.90）。

つまり、「コミュニケーション」は、「心理的な安定」や「人間関係の形成」と不可分であると言えよう。

さらに、池田（2015）は、事例研究の今後解決すべき課題として、学校生活の文脈で研究を行う必要性を指摘している。

本研究では、知的障害教育校小学部における集団リズム遊びの実践を通して、特別な支援を必要とする児童がどのような「学び」をしたかを明らかにし、そこから集団リズム遊びの意義と課題について検討することを目的とした。

## 2. 研究方法

### (1) 実践内容等について

実践は知的障害教育校の教育課程の一環として、小学部全員で行われた合同授業（45分間）の計5回であり、1回の実践は30分～40分である。

対象は小学部児童（1年～6年）であり、人数は11名～18名であった。

指導は筆者が行い、学部教員がTTとして関わった。

### (2) 分析方法

実践場所に指導者側の両側から固定カメラ2台を設置し、実践記録を撮った。

その実践記録から、指導者の指導言語及び行動を逐語的に記録するとともに、それに対する児童の反応（活動）を具体的に記録して分析を行った。

## 3. 事例を通したリズム遊びの意義と課題

### 事例1：

第5回実践（表1）の最後の場面で、筆者が「今ね、Rちゃんがいいこと教えてくれたの」と紹介した時、R児がカエルの跳ぶ真似を実践し（写真1，2），それを見ていたS児、M児が「こんなことできるよ」と、自分の動きを主張するのを見ると（写真3，4），周りの児童の行動や言葉がきっかけで子どもたちの世界が広がっていく様子が見て取れる。それは、R児やS児が自分の動きをした時に、多くの子どもたちが、R児、S児の方に注目している（写真2，3）ことでも明らかである。



写真1

表1. 第5回実践の活動記録から抜粋（全39分22秒間のうち）

時間	指導者の言葉かけと対応	児童の反応
37:46 38:08 38:46	<ul style="list-style-type: none"> <li>座ってください。</li> <li>今ね、Rちゃんがいいこと教えてくれたの（A）。</li> <li>上手，上手。</li> </ul>	<p>（R）R児，「見てて，見てて」と言いながらカエルが跳ぶ様子を真似る。それを見て，S児，M児が自分の動きを主張する。</p>
39:22	<ul style="list-style-type: none"> <li>いろんなことやってくれて，いろんなこと真似したかったんだけど，今度…。</li> <li>L君のやった（泳ぐ真似）こういうのもやりたいよね。（R） こういうのもやりたい。</li> <li>すごく難しいこと勉強したんだよ。みんな上手でした。</li> </ul>	<p>（A）L児，両手を交互に前へ押し出す動きをする。</p>

\*（A）：action，（R）：reaction



写真2



写真3



写真4



写真5・6. キツネとガチョウ（電車で動く）



写真7. 児童の身長にあわせて橋をつくる…くぐる



写真8・9. 音楽にあわせて、自然に橋が揺れている。児童が主体的にくぐっていく。



## 事例2：

鬼ごっこの要素を含めたリズム遊び「キツネとガチョウ」では、一人の児童の反応から、自分の好きなものになって動く遊びへ発展させた。その中でB児の好きな電車になって動いた時、一人の児童が指導者の後ろにつながったのをきっかけに、少しずつ指導者の後ろにつながるという自発的な動きが見られた（写真5, 6）。結局、7名までつながったところで列がきれている。

## 事例3：

ゲーム性をもったリズム遊び「ロンドン橋落ちた」では、実践記録から、第4回の実践当初で、すでにM児が教員と橋をつくっているのが認められた。それをきっかけに、R児が橋をつくりたいと言い、C児とR児で橋を作るなど、主体的な活動が始まっていた。しかし、筆者はそのことに気がついていない。

第4回、第5回は、「子ども同士がグループになれる音楽リズム遊び」というコンセプトのもと、指導者の意図が大きく影響した実践内容となった。そのため、特に第4回については、説明不足があったり、指示語が多かったりして子どもたちの動きを十分活かすことができず、児童のみならず教員の混乱も招いてしまったように感じられた。

第5回も指導性はまだ強い部分があるが、初めて曲を使用し、児童の楽しさの方を重視した。

始めは一重円で、教員が児童の間に入って誘導していたが、円を崩し、自由に橋を潜っていくようにした（写真7, 8, 9）。

第5回では、友達ペア1組、先生とペア4組が橋をくぐり、一方、友達同士で橋を作っているペアが4組、先生とのペアが2組と様々な展開が見られた。

曲がかかると、そのリズムにのって、揺れる橋、左右に傾く橋などが自然に生まれ、つかまる橋などそれぞれ楽しんで工夫している様子が観察された。

低い橋では、児童は自然に這って通るなど、対応

も主体的にできている。また、橋を作る児童と渡っていく児童が途中でスムーズに交替することができ、集団リズム遊びの中で役割分担の学びもできたことが示唆された。

#### 事例4：

自閉症スペクトラム児であるY児についてみると、両手を斜め方向に上げる動きは、真似はできるものの、真上に上げて飛び跳ねる動き（図1）になりがちであった。しかし、2回目では、写真10、11のよ



うに、左に曲げて左斜め上に伸ばす、右に曲げて右斜め上に伸ばすという正確な動きに進歩していることが認められた。このとき、Y児は明らかに指導者の動きを見て真似をしていた。

#### 事例5：

自閉症スペクトラム児であるI児は、一見反応が乏しいように思われたが、小さな動きながら後方で真似していることが数多く散見された。指導者の動きが変わったのを見て、真似して動きを変えた授業記録は、I児のコミュニケーションの改善における可能性を感じることができる発見であった。

しかし、筆者自身授業記録を詳細に見るまでは、その子なりの反応を見極めることができていなかったことに気づいた。実践記録を見ると、動きの見本にしている児童に偏りがある。どうしても活発に動いている児童の方に目を奪われやすいという反省がある。集団での活動では、隅の方で小さく反応している児童の一瞬、一人一人の小さな変化をとらえられる目を持つことが課題である。そのために、TTと共通理解を図り、協力を得ることが必要となる。

#### 4. まとめ

以上をまとめると、①児童は相互に学びあっている。②学びは他者の動きや言動の模倣に起因し、その点において集団リズム遊びの教育的意義が認められる。③模倣は「見ること」を基礎とするが、「見る」から「観る」への発展により、無意図的な模倣から意図的な模倣に移行し、ここにおいて本来の「学び」につながっていると言える。④しかし、一人一人の自由な表現を活かす観察評価の力と他教員との協力

体制が課題としてあげられる。

模倣から自己表現へ至る過程で、子どもたちは集団の中で相互に学び合うことで成長していることを認めることができ、そして、それを可能にすることができるのが、「みんな違ってみんないい」というダンス領域（リズム遊び）であることを改めて認識した。それは、また、「養護・訓練」ではなく「自立活動」につながる活動であると考ええる。

註1) 自閉症スペクトラム障害（Autistic Spectrum Disorder）の略

註2) 主として2人の人の中にある相互信頼の関係  
謝辞

実践研究では、小学部の先生方のご支援をいただきました。また、子どもたちとの出会いが多くの学びにつながりました。記して謝意といたします。

#### 主要文献

池田史志（2015）重度・重複障害児を対象とした関わりに関する教育研究の動向と課題．広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部64：29-38.

石倉健二・黒山竜太・高島恭子・豊島 律・浦田奈津季（2010）自閉症児に対する模倣の研究．長崎国際大学論叢10：169-174.

小林重雄・加藤哲文（1991）発達障害児のノンバーバルコミュニケーション行動の指導をめぐる（ワークショップI，日本特殊教育学会第28回大会ワークショップ報告）．特殊教育研究28（4）：71.

S. グリーンスパン・S. ウィーダー著，広瀬宏之訳（2009）自閉症のDIR治療プログラム フロアタイムによる発達の促し．創元社．

佐伯 胖監修（2010）「学び」の認知科学事典．大修館書店．

佐藤克敏・涌井 恵・小澤至賢（2007）自閉症教育における指導のポイントー海外の4つの自閉症指導プログラムの比較検討からー．国立特殊教育総合研究所紀要34：17-33.

佐分利育代（1996）知的障害児のダンス学習におけるコミュニケーション．日本体育学会大会号（47）：592.

文部科学省（2009）特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚園・小学部・中学部・高等部）．海文堂．  
国立特別支援教育総合研究所ホームページ

<http://www.nise.go.jp/cms/13,0,55,251.html>

平成28年9月1日取得

平成30年3月30日 受理



# **A Study on the Significance and Problems of Group Rhythmic Playing in Intellectual Disability Education**

**Masako CHINO**